

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

魔（メイジ） おせうさん

【作者名】

琥珀堂

【あらすじ】

全ての物語が大団円を迎えたのち、キュルケとタバサの仲良し二人組は、ルイズの『世界扉（ワールド・ドア）』を使って地球を訪れ、日本の一地方にアパートを借りて、のんびりとした休暇を楽しんでいた……。どっかで見たとような設定の、ぐだぐだゆったりな物語。

H 県の市のメイジお嬢さんズ

ブウウウ ンンン 。

古びた扇風機が、ちよつとした雑音を撒きながら、部屋の空気をぎこちなく攪拌する。

その機械の、回転する羽根を収納した金属の丸い網のすぐ前で、タバサはちよこんと正座していた。赤いフレームの眼鏡の奥にある目は涼しげで、青く短い髪は、さやさやと軽快に揺れている。

彼女は、人目をばはかるように辺りを見回した。風メイジとしての特質である耳の良さや、気配を察知する勘などもフル活用して、室内と、部屋の外の廊下に誰もいないことを確認する。

そして、充分に口を安心させると、小さく頷き、その整った顔を、扇風機に近付けた。

「……ワレワレハ……ハルケギニアジンダ……」
そつと、恐るべき禁忌の言葉を、信頼できる相手の耳元でのみ囁くように、タバサは潜めた声で、扇風機に語りかけた。

相手はタバサの信頼に応えた。風の乱れが彼女の声も乱し、まるで名状しがたき怪生物が、人間とは異なる声帯でもって発声をしたかのように、不気味に震えた奇妙な音声を、室内に響かせたのだ。

タバサは、無表情な娘である。故に、この遊びを覚えた時も、特にはしゃいだりはしなかった。

しかし、見る人が見ればわかるであろう。彼女の、眼鏡の奥の瞳のきらめきを。その満足げな表情の表れを。

そして再び、彼女は秘密の遊戯に耽る。

「ワレワレハ ガリアジンダ……」
「ただいまー」

ガラリと窓を開けて、キュルケが入ってきた。

タバサの表情が固まる。彼女は、窓の外の警戒を失念していたのだ。この部屋は二階にある。だから、外は気にしなくてもいいと

しかし、キュルケはメイジであるから、当然フライの魔法が使える。

その上、妙にもものぐさなところがあるから、階段を登るのがめんどくさいと思ったら、躊躇なく魔法を使って、窓から部屋に戻ってくるのだ。今まで、何度もそういう場面を見てきたのに　タバサは、己の詰め甘さを呪った。

そして、キュルケはというと、部屋の中に泥を持ち込まないよう、慎重に窓枠の外でスニーカーを脱いで、そのまま何も見なかったかのようになり、部屋の中に漂い入ってきた。

「暑いから、スーパーでアイス買ってきたわー。ラッキーなのよタバサ、今日は木曜日で冷凍食品二割引の日だから、アイスも安く買えたのよー！ 私はもちろんパッションフルーツ&オレンジのシャーベツトで……あなたはチョコミントでよかったかしらね？」

「そ、……それでいい」
聞かれずに済んだ、のだろうか？　嬉しそうに空中でスーパーのビニール袋を一回転させるキュルケの様子をうかがいながら、タバサは自分の心の動揺を鎮めようと努める。キュルケの様子からすると、気付いている様子はない。ならばいい、それならば問題ない　黒歴史になるべき事実は、永遠の闇に葬られるべきなのだ。

「あ、そうそう、タバサ」
玄関まで靴を戻しにいったキュルケが、くるりと振り向いて、輝くような笑顔で言った。

「あなたはガリア人で合ってるけど、私はゲルマニア人だからね？」
聞かれてた……。

タバサは、絶望的な気持ちでゆっくりと頭を垂れた。そしてそのまま　畳の上で、丸くなった。

第一話　H県O市のメイジお嬢さんズ

「はい、タバサこれ。スプーン」

「……ありがとう……」

まだシヨックの抜けきらないタバサは、虚ろな目で、差し出されたアイスクリーム用のスプーンを受け取った。

キュルケとふたりで、円形のちゃぶ台を挟んで座る。その天板の上には、少しだけ霜をかぶった、ふたつのカップアイス。

まず、キュルケが自分のアイスのフタを開け、オレンジ色のきらきらしたシャーベットを平べったいスプーンですくうと、優雅に口へと運んだ。

「ん〜。やっぱり暑い日はアイスよね。ハルケギニアでやってたみたいに、井戸水で冷やしたフルーツも悪くないけど、これは冷たさと甘さが違うわ〜」

その幸せそうな表情に誘われるように、タバサも自分のアイスに口をつける。

スーッと口から鼻に抜ける、ミントの爽快感。チョコレートのしつかりとした甘さがそれに続いた。はしばみ草のがつとりとした苦さもいいが、ミントアイスの絶妙な香りもいいものだ。

その味わいに、彼女は肩の力を抜いた。恥ずかしい過去が、美味しさに塗り潰されて消えていく。というか、積極的に忘れようと、タバサの方で努力した。

悩み多きタバサとは対照的に、キュルケはリラックスした様子で、唇の端についた溶けかけのシャーベットを、魅力たっぷりな舐め取りながら、こんなことを言った。

「ホント、この世界はいいわねー。美味しいものはいっぱいあるし、便利なものや面白いものもたくさんだし。

ほんの少しの間、こっちで羽を伸ばすだけのつもりだったのに、快適すぎて帰りたくなくなっちゃったら、どうしようかしら」

「大丈夫」

タバサはスプーンを咥えたまま、真剣な表情で言った。

「向こうに帰っても、こちらで手に入れたオンライン小説コミュニティのアカウントは、消えはしない」

「あなたは完全に、こっちの世界をメインにしちゃってるのねえ……」

キュルケは最近ネット小説にハマっている友人に苦笑しながら、うんと伸びをした。すると、部屋の中を、ほのかに潮の香りがする風が通り過ぎて、彼女の赤い豊かな髪を揺らした。レースのカーテンが揺

れる窓の向こうには、緩やかに下る坂に沿って並ぶ街並みを見下ろすことができる、さらにその向こうには、青い海が広がっていた。

地球という惑星の中の、日本という小さな島国。その中のH県という地区の、Oという海沿いの街の片隅で　丘の上にある築三十年のアパートの、二階の一番奥、六畳一間、キッチン、トイレ付きで月四万という豪華絢爛な物件をシェアして　タバサとキュルケは休暇を楽しんでいた。

「ハルケギニアではいろいろあったけど……お互いに死なずに、こうしてのんびり旅行に来れるような日々を迎えられて、本当に良かったわね……」

「本当。父様の復讐や、母様の病気を治すために必死になっていた頃は、こんな日が来るなんて、思ってもいなかった」

「あなたは特に苦労したものね、タバサ。あなたの問題が決着したあとも、ルイズやサイトを、陰日向に手伝って頑張っていたし」

「苦労はした……でも、全てに決着をつけてくれたのは、あのふたり。アーハンブラ城の時も……ジョゼフとの決戦の時も……ロマリアやエルフとのいざこざや、大隆起問題の時も……ルイズとサイトが、死に物狂いで頑張って、一番いい結末を作り出してくれた。私はたぶん……そばにいただけだと、思う」

「そうかしらね？　あの子たち、けっこうつつかりしてるから、タバサがいなかったら、五、六回は死んでたかもよ？」

「冗談めかして言うキュルケに、タバサは冗談っけのまるでない様子で、こっつ返した。

「それは、私もそう。彼らがいなければ、五、六回は死んでいた。……そして、トリスティンの魔法学院にあなたがいなければ……きつと、心が折れていた」

まるで付け足しのようなその一言に、キュルケは破顔し、身を乗り出して、小柄な親友の青い髪をわしゃわしゃと撫でた。

見た目も性格も対照的なふたりだが、仲良しっぷりではサイト・ルイズや、ギーシュ・モンモランシーのペアにだって負けはしないのだ。

「まあ、とにかく……無事に今を迎えられたことに感謝しましょー！

ルイズが『世界扉（ワールド・ドア）』を完全に習得したおかげで、私たちはこうして地球にバカンスに来ておるけど、この旅行だって、ハルケギニアが平和になってなきやできなかったんだものね」

かつて『ゼロ』のルイズと呼ばれていた少女は、たくさんの試練の中で成長し、さまざまな虚無魔法をマスターしていった。

最初は手鏡程度の大きさしか作り出せなかった、異世界との行き来を可能にする扉を作り出す魔法、『世界扉（ワールド・ドア）』も、今では人がらくらく通れるサイズのを、コモン・マジック程度の気軽さで作ることができる。地球とハルケギニア、両世界の行き来の安全を十分に確かめたルイズが、彼女の使い魔の両親のもとに挨拶に向いたのは、ついこの間のことだった。

そして、キュルケとタバサのコンビは、全く新しい地球という土地への好奇心を満たすため、ルイズの作った扉をくぐったあと、わざわざ現地に部屋まで借りたというわけだ。

「ジャンも来たがってたけど、今じゃゲルマニアのツエルプストー大技術工房の主任だものねー。大忙しだから仕方がないわ。お土産はいっぱい持って帰ってあげるつもりだけど。」

地球産のこのTシャツとか、きつと喜ぶんじゃないかしら。ハルケギニアではちよつと作れないものだし……それに、地球の文字が入ってるってのも、結構オシャレだしね」

キュルケはそう言って、自分の胸元に手を当てた。豊かな胸が、布地を前方に大きく押し出しているが、彼女の着ているTシャツには、日本語で『微熱』と書いてあった。

タバサの着ているものには、やはり日本語で『雪風』と書いてある。ふたりがこの世界に来てすぐの頃、フリーマーケットで手に入れたものだ。他にも何種類か、同じような日本語プリントシャツを購入したが、彼女たちには日本語が書かれているという時点でファッショナブルなのであって、その内容は特に気にならないらしい。以前、キュルケが『このロリコンどもめ』、タバサが『セクシーコマンドー』と書かれたシャツを着て才人に会いに行つたところ、彼は笑いが止まらなくなり、ついには呼吸困難に陥らせてしまった。

キュルケは、彼女の思い人であるジャン・コルベール氏のために、同じような日本語Tシャツを購入していた。いつか、タバサとしてるように、コルベールと日本語Tシャツでペアルックをするのがキュルケの夢だが、プレゼント用のそのシャツに書いてある文字が『不毛地帯』であることを、文字をよく見ずにサイズだけで選んだ彼女は、気付いていない。

「ゲルマニア貴族の私が、地球の平民の服装であるTシャツやジーンズを着こなして向こうに帰ったら、きつとニュースになるわね。新たなトレンドがハルケギニア上陸！ とかって。これからは為政者も、どんどんカジジュアルになっていくべきだと、私思うのよ。そうそう、為政といえば……シャルロット女王陛下におかれましては、ガリアの国政は大丈夫なのかしら？」

女王当人が不在というのは、何気にマズいのではないかとキュルケは思ったが、タバサの返答はあっさりしたものだった。

「大丈夫。母様と、ジョゼットが頑張ってくれてる。」

それに、捕まえたイザベラをヴァリエール夫人に預けて、教育してもらっている。夫人は一カ月ほどで、イザベラを国家に忠実で、誇り高い忠臣に作り変えてくれると約束してくれた。

この娘、さりげなく恐ろしいことをしている、と、キュルケは思った。

「でも、ということとは、あなた、イザベラを国政に参加させる気なの？ 彼女にかなりいびられてみたいだから、仕返しにもっと厳しい立場に置くかと思ってただけど」

「イザベラには、それなりに人を使う才能がある。だから、それを活かすことにした。」

それに、彼女があんな性格になっていたのは、父親の影響によるところが大きい。あれもまた、ジョゼフの犠牲者のひとり。だから、恨まないことにした」

「そう……」

キュルケは、納得して頷く。かつてのタバサは、伯父であるジョゼフへの復讐のために、何もかもを振り捨てていた印象があった。その

ジヨゼフの娘であるイザベラに対して、そのように思えるということ
は、もう自分の気持ちに決着をつけ、周りのことを見る余裕ができた
ということなのだろう。

「ジヨゼフ王も、恐ろしい人物だったわね。ただ、彼の最期のことを思
うと、少しやるせない気持ちになるけれど」

「彼の結末は、私にとっても、よかったと言えるものじゃなかった。父
様とのことを考えると、やはり悲しい。でも、きつと、因果応報のひ
とつの形なのだと思う。」

ただ……私の手で、彼を倒すことができなかったのは、非常に残念
だから、とタバサは言っていて、ちゃぶ台の上にノートパソコンを乗せ、
電源を入れた。

「ジヨゼフが死んだあと、私はささやかな復讐をすることにした。あ
の世にいるあの男のことを、今さらどうにかすることはできないし
……イザベラとか、直接関係ない人間に、代わりに憎しみをぶつける
のも、間違っていると思うから……これはあくまで、私の気持ちを納
得させるためだけの、個人的な儀式」

「ふうん？　どんな儀式なの？　パソコンを使う復讐とか、ちょっと
想像つかないんだけど」

「見てみれば、わかる」

タバサはパソコンを回転させ、キュルケに画面が見えるようにし
た。

そこにあっただのは　。

ふたつの月が妖しく輝く真夜中。ジヨゼフの寝室の扉が、荒々しく
蹴破られた。

抜き身の剣を手に、王の部屋に飛び込んだのは、若き騎士カステル
モール。憎しみの表情を隠そうともしない彼を前にしたジヨゼフは、
しかし落ち着いていた。就寝の直前だったのだから、寝巻き姿で、悠
然と自分のあごひげを撫でている。

カステルモールが、雷鳴のような叫び声を上げた。

「ついに追い詰めたぞ、憎き篡奪者ジョゼフ！ 亡きシャルル様に代わって、このバツソ・カステルモールが貴様に天誅を下す！」

「ふっ、小鼠が吠えるわ。シャルルが死んだ時点で、俺に噛みつくこともできなかつた臆病者が、俺をどうにかできると思っているのか？」

「できるさー！」の口のために、俺はずっと修行を積んできたんだ！」

ジョゼフに飛びかかるカステルモール。しかし、ジョゼフの動きの方が速い。ナイトテーブルから杖をつかみ上げ、襲撃者に向ける。ジョゼフは虚無の使い手だ。彼はほんのワン・スペル唱えるだけでも、魔法を失敗させて爆発を起こすことができる。その一撃を食らえば、良くて気絶、悪ければ即死してしまうだろう。カステルモールの命運は、ここで尽きたかのように見えた。

しかし、カステルモールは、ジョゼフを驚かせる行動に出た。剣を放り捨てたのだ。その意図をジョゼフが量りかねている間に、カステルモールはジョゼフの面前までたどり着き、タックルを食らわせ、王をその寝台に押し倒すと、無防備にさらされているその耳に向かつて、ふうつと息を吹きかけた。

「おおっ！！」

くすぐつたいその感触に、ジョゼフは思わず仰け反る。彼の反応を見たカステルモールは、ニヤリと得意げに口の端を釣り上げた。

「お前の愛人たちから、情報は得てあるんだ。ジョゼフ、お前は耳は弱いらしいな……ここを重点的に攻められれば、まるで代用肉のようにグンニヤリしてしまうそうじゃないか」

「くっ、おのれ、誰だそれを漏らしたのは……モリエール夫人か？」

うっ、うおおおっ」

再び耳に息をかけられ、悶えるジョゼフ。カステルモールは、その動きを押さえ込もうと、ジョゼフの肩をしっかりと押さえ込んでいた。ふたつの屈強な肉体が、ベッドの上で重なったまま、拮抗する。

「ジョゼフ……俺は、貴様を殺したりはしない……ただ、お前のガリア王としての名誉を叩き潰す。」

お前がシャルル様を殺してまで欲しかった王権を、どうでもいいも

のにしてやる。この世のあらゆるものが、色あせたものに感じるようにしてやる。」の俺だけにしか興味を持たないように……貴様の中に、俺を刻み込んでやる。」

「な、何をするっ……よせ、よすんだっ……！俺は、俺は最初から、王権などどつでもいいんだっ。」

「信じると思いつのか？」

カステルモールの手が、ジョゼフの胸倉をつかみ上げ、そのまま強く引つ張った。寝巻きのボタンがちぎれ、中年であるにもかかわらず、筋肉で引き締まった胸が露わになる。カステルモールは、青い胸毛で覆われた王の胸板を優しく撫で、ジョゼフは恥じらうかのようにな、顔を背けた。

「まるで鉄の板だ。きつと、下半身も同様にたくましいのだろうか。エモノを突き立てるのは難儀だろうが……じっくりとほくしてやれば、きつと受け入れるようになるはずだ。そうだろうか？」

「うおおっ……知るかっ……知るものかっ……」

逃れようと体をくねらせるジョゼフの腕に、もはや力が入っていない。耳という弱点へ、カステルモールは息による愛撫を執拗に繰り返していたのだ。体の芯から痺れ、とろけていく感覚に、ジョゼフは嫌悪とともに、甘美なものも感じていた。

カステルモールの唇が、ジョゼフの耳たぶを挟み込む。口ひげによっても耳をくすぐられ、ジョゼフの全身に稲妻が走る。悔しいしかし、感じてしまう。

やがて、大いなる諦観とともに、ぐったりと力を抜いたジョゼフの前にして、カステルモールは己がズボンに手をかけた。そして、それをゆっくり引き下ろし、この日のために鍛え上げた立派な凶器を、

「……………」

キュルケは、そこでノートパソコンを閉じ、初めて納豆を食べた時

の表情で、タバサを見た。

タバサは、涼しげな眼差しで　しかし、自信ありげな光を瞳の奥に宿して　親友を見返し、言った。

「誰も巻き込まない。私の精神衛生だけが保たれる。　そんな、ささやかな復讐」

「復讐は何も産まないわ、タバサ！」

涙ながらに、キュルケは訴えた　さりげなく堂々と巻き込まれているカステルモールさんが、たぶん一番可哀想だと、気付いてしまったのだ。

ちなみにこのタバサの『復讐』小説は、某オンライン小説コミュニティに投稿されており、腐ったご婦人たちに大人気らしい。

アイスによる肉体的な冷感とともに、不本意な精神的冷感によっても過剰に涼を得てしまったキュルケは、その日の夕食を熱々辛口のカレーライスにして、暖冷のバランスを少しでも整えようと頑張るのだった。

「キュルケ。地球とハルケギニアのコラボレーション企画として、何にでも合うカレーの具にはしばみ草を」

「やめて。お願いだから本当にやめて。タバサ」

これは、ゼロと呼ばれた少女と、その使い魔の少年についての物語が、全て大団円を迎えたあとの　赤い女性と青い少女の、だからまったりのんびりした物語である。

見つめる瞳がろくなものを見ない

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーは、かつて母親にこう言われたことがあった。

『いいですかキュルケ。ゲルマニアの女たるもの、見る目を養わねばなりません。』

殿方の誠実さ、能力、将来性。外見や肩書きなどからは読み取れない大切なものを、眼光紙背に徹するように見抜けるようにならなければなりません。』

幼きキュルケはその言葉に頷き、以来ずっと見る目を養うべく、練習を続けてきた。

いろいろな男を見て、付き合ひ、言葉を交わして 内面を、その人の本質を感じる力を養ってきた。

そして彼女は、やがて将来を預けるに足ると感じられた男性を、息もできないような激しい情熱の中で見つけることができた。まだ結婚はしていないが、その選択はきつと間違っておらず、キュルケの母親の教育は、遠からず最も上等な形で実を結ぶことになるだろう。

だが、しかしそれは、もはやこれ以上努力しなくていい、というわけではない。

見る目は必要だ。ゲルマニアの女として、結婚したあとでも、それを日々研ぎ澄ませていかなければならない。

なぜなら、女が見抜かねばならないのは、男性の内面だけではないからだ。

キュルケは、地球に来てからも、見る目の必要性を感じ続けていた。たとえば、このような時……。

「……このキュウリと、こっちのキュウリ……どちらを買うべきかしら……」

スーパーマーケットの野菜売り場で、ふたつのキュウリの袋を右手と左手にひとつずつ持って、キュルケは慎重に検討していた。

目を皿のようにして、右の袋と左の袋を注視する。値段はどちらも

同じ、二本入りで百円だ。どちらでもいいように思える　　が、そこで適当に決めてしまうのは素人だ。

野菜は生もの。一本として同じものはない。ならば当然、そこには優劣がつく。比べて、見抜いて、良い方を選ばなければならぬそれが、ゲルマニアの女の義務だ。

(重さは……さすがに、ほぼ均等に揃えてきているわね。手の感覚では甲乙つけがたいわ。まっすぐで形が良いのは右の袋だけど、左の少し曲がったキュウリも、野性味があって美味しそうだわ。

手触りは……ビニール袋の上からだからわかりにくいけど……ムッ。左の方が、トゲがしっかりしているわ！ トゲトゲしているキュウリは新鮮だって、グルメ番組で農家のおじさんが言ってたわね)

キュルケは五分ほどの吟味を経て、左手のキュウリを買い物カゴへ入れた。オリーブ色の美しい顔全体に、自信のある選択をした人間特有の、輝くような満足感をみなぎらせて。

次は卵を選びに行こうと、コーナーを移動していると、背後からタバサがトテトテと駆け寄ってきて、キュルケの持つカゴの中に、カスタードメロンパンを入れた。

「あら、タバサ。今日のおやつはそれにしたの？」

振り向いて聞けば、青い髪の小柄な友人は、無言でこくりと頷いた。キュルケはニコリと微笑み返し、再び卵コーナーへ向けて足を進めようとする。

カゴを持つ者の視線が、自分から逸れたと見たタバサは、隠し持っていたチョコチップクッキーの箱を、そっとカゴに滑り込ませようと手を動かし、

ガシッ。

次の瞬間には、笑顔のキュルケに、その手をしっかりと掴まれている。

「タバサ。……どっちかひとつにしないで」

天使のような笑顔で　　しかし目を笑わせず、キュルケは断固とした調子で告げた。

見る目を養ったゲルマニア女にとって、子供が背中に隠したお菓子の存在を見抜くことぐらいは、朝飯前なのだ。

第二話 見つめる瞳がろくなものを見ない

「ミノタウロスに掴まれたかと思った」

結局、クッキーの方を売り場に返しに行って、戻ってきたタバサはそうばやいた。

かつて、ラルカスというミノタウロスと死闘を演じたことのある彼女の言葉には、実感がこもっていた 膂力ではない。スゴ味という点で、タバサの親友はかの強力な亜人に匹敵していたのだった。

そんな少女の言葉に、キュルケは、Lサイズの新鮮な卵（もちろん、棚の奥の方にある賞味期限の遠いやつを選んだ）をカゴに入れながら、あきれたように言い返す。

「そんな恨めしそうな目で見てもダメよータバサー。お菓子は一日にひとつだけ。こっちに来た時に、ちゃんとそう決めてたじゃない。あんまり無駄なお金は使えないんだから、嗜好品はできるだけ控えないとね」

半額シールの貼られた中華めんをチラリと見て、さつと手に取る。無造作に見えるかもしれないが、計算された動きだ。キュルケは先ほどこから、広告で特売と宣伝されていた商品か、割引シールの貼られたものしかカゴに入れていない。

そう、ふたりには金がない。少なくとも、ハルケギニアにいた時ほど、遠慮無しに散財できる状態にはないのだ。それがわかっていながら、タバサもいつまでもぐずぐず言ったりはしなかった。ただ、少し寂しそうに、着ているTシャツのお腹の部分を撫でただけだ（ちなみに彼女が今日着ているTシャツには、「食いしん坊バンザイ」と書かれていた）。

「向こうのお金が、こちらで通用したらよかったのに……」

無念そうな呟きに、キュルケも重々しく頷く。

「仕方がないわ。私たちのエキュー金貨は、この国の人にしてみれば、

どこの国の貨幣でもない、得体の知れない金の彫刻ですもの。

「一応、貴金属の価値は、こちらでも向こうも変わらないみたいだから、宝石を売ってお金を得ようとしたことがあるけど……どうなったかは覚えてるわよね？」

「うん……」

かつての記憶を脳裏に蘇らせ、タバサはぶるつと肩を震わせた。

ハルケギニアから、地球にやってきてすぐのことだ。地球での生活資金を得ようと、キュルケは自分の持ち物の中から、宝石をたっぷりと散りばめた、豪華なネックレスや指輪を売ることに決めた。

もちろん、ハルケギニア人のキュルケには、宝石を売るために必要な身分証明書がない。そこで、事情を知っている才人の父親にアクセサリーを渡し、代理で換金してきて欲しいと頼んだのだ。

その結果　平賀父は犯罪の疑いをかけられ、警察の人たちに詳しく話を聞かれることになってしまった。

「うん、まあ、ちよっと考えればわかった話よね……ごく普通のご家庭のお父さんが、いきなりたくさんの高価な宝石を売りに来たら、宝石店の人も怪しむわよね……」

「しかも、由来が説明できない。平賀家に代々伝わるような古めかしいものでもないし。盗品と思われるのは、むしろ必然」

もし無事に換金できていたら、全部で二億円ぐらいの金額になったという。平賀家の総資産を、軽く超えていた。

「脱税の疑いもあったから、税務署の人たちも押しかけて来たのよね……ものすごい勢いで……」

「あれは、たとえるなら『眠れる税務署が立ち上がり、牙を剥いた！』って感じだった……」

ぶっちゃんけ、エンシエントドラゴンの襲来より怖かったという。

「あれで何事もなく、サイトのお父様も無罪放免されたのは、ホントに始祖のお恵みだわ。サイトが『謎の外国人に、換金してくれって頼まれた』って、まことしやかな言い訳を思いついたのがよかったのね。実際、嘘じゃないし」

「あのあと、サイトのお父様に、ふたりでドゲザしたのも、いい思い出」

「ハルケギニアにいるうちに学んだ日本の習慣で、まさかそれを真つ先に実践することになるなんて、思ってもいなかったけどね」

アハハ、と笑いつつ、その時の安堵を思い出したのか、キュルケも自分の胸をなで下ろす。彼女の着ているＴシャツの「朝だよ!」³という、意味不明な文字の上を、手のひらが滑っていく。

「で、結局、宝石類も出所不明のものとして、警察に押収されちゃって（持ち主である私が名乗り出られないから、きつと国庫に入っちゃうんでしょうねえ）、日本のお金を手に入れる算段も狂っちゃって……仕方ないから、売っても騒ぎにならなさそうな、高くも安くもないハルケギニア産の食料品や工芸品を、サイトが開いたネットショップで毎日売ってもらうことで、かろうじて生活費が得られるようになったのよ。供給はハルケギニアから、ほぼ無尽蔵に出せるけど、需要の方に限界があるから……個人のネットショップの売り上げなんて、たかが知れてるしね……ホントに私たちの手に入る日本円って、スズメの涙なの。だから余分な出費は歓迎できない……わかるわね、タバサ？」

「わかる」

「よろしい。おやつは追加してあげられないけれど、素直なあなたのために、夕食を大盛りにしてあげるわね。今夜はさっぱりと、冷やし中華にするつもりよ」

「……トッピングは、前にやったガリアスペシャルにして欲しい」「了解。ちゃんとゴーヤも買ったから、安心なさいな」

ガリアスペシャルというのは、タバサがこちらに来て開発した、冷やし中華の新しい次元である。

キュウリの代わりにゴーヤの千切りを使い、それを錦糸玉子、細切りハムと一緒に中華めんの上に並べてから、細かく刻んだミョウガを全体に散らす。さらに、通常ならば冷やし中華の頂上に乗るのは、サクランボかトマトであるのに対し、ガリアスペシャルでは梅干しを一個丸ごと乗っけるのだ。

この味覚にケンカを売っているとしか思えないガリアスペシャル、この名に反して、ガリア王国において平然と食することができるのは、

その国の女王ただひとりだけであろう。

やがて、買い物を終え、ふたりはスーパーを出る。

O市は坂の多い街である。スーパーは海沿いの低い場所にあり、ふたりの住むアパートは丘の上にある。キュルケの手には、食料品や日用品でパンパンになったエコバッグがあったが、彼女はそれを持ったまま、軽い足取りでアパートへ続く石段を登っていく。横を歩くタバサは手を貸していないし、バッグはけっして見た目より軽いわけではないのに。秘密は、反対の手に持たれた小さな杖にある。物体を軽く浮かせることのできるレビテーションは、車も自転車も持たない彼女にとっても重宝されている運搬魔法だ。

本当なら、フライを使ってびゅーんとアパートまで帰還してもいいのだが、それをやると夏のミステリーとして世間を騒がすことになってしまうので、さすがに自重している。やるとしたら、誰の目もないアパートの裏手とか、その辺だけに限る。

坂の上を見上げ、それに連なる青い空を眺める　ばるるるという音を響かせながら、テレビ局のものと思しきヘリコプターが、のんびりと西から東へ飛んでいった。

その光景は、キュルケにある乗り物のことを思い出させた。

「そういえば、あのゼロ戦、だったかしら。あれ、博物館に展示されることになったみたいよ。こないだ、サイトが電話で言ってたわ」

「ゼロせん？」

なじみの薄い名前に、タバサはそれが何であったか思い出そうと、首を傾げた。

「ほら、あれよタバサ。サイトの乗ってた、ものすごく速い飛行アイテム。タルプの時に活躍したあれよ。」

こっちに来る時、ついでに持ってきたじゃない？ 元の持ち主が、この国の王様に返して欲しいみたいなことを遺言に書いてたって、サイトが言うから……。ルイズが世界扉を維持している間に、私がレビテーションで移動させて。さすがに返しに来ましたーとか言えないから、適当にその辺に置いておいて発見させちゃっ……。」

「思い出した。はっきりと昔のものだと気付かれる前に、駐禁シール

を貼られたあれ」

「そう、あれ。やっぱり道端に置いていたのはまずかったわね」

佐々木氏も、まさか死後数十年を経てから違反キップを切られるとは、思いもしなかっただろう。

「大昔の戦争で行方不明になっていた飛行アイテムが、どこからかいきなり帰ってきたってニュースになってたけど。間違いなく本物だし、歴史的に貴重だっというんで、ちゃんと保存してもらえることになったってわけ。

あれがハルケギニアの空を飛んでるのが、もう見られなくなるのは、ちょっと寂しいけど……ま、道具とはいえ、いい加減里帰りしたかったでしょうし、これでよかったのよね。最後に、サイトとルイズを乗せてトリステインの空を飛んで、ふたりの婚前旅行に一役買ったみたいだし」

「キュルケ。……悪いけれど、その話は……」

急に声のトーンを暗くしたタバサに、キュルケははっとして、自分の口を押さえた。

「あっ、「ごめんなさい……そうだったわね。あなた、サイトのこと……」

タバサは、切なげに目を伏せ、小さくかぶりを振った。

それは、彼女の過ぎ去った青春のページだった。地球への帰還を果たしたあと、平賀才人は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと婚約した。

多くの人々が、これを祝福した。ヴァリエール公爵やカリーヌ夫人も、ふたりの熱意と絆を認めた。地球の平賀家の両親は、行方不明だった息子が、嫁を連れて戻ってきたことを、泣いて喜んだ。魔法学院の友人たちも、教師や使用人たちも、いろいろな国の、王族も市井の人々も。そしてもちろん、キュルケとタバサも。

ただ、才人の中にイーヴァルディの勇者を見ていた少女だけは、心の中に何か、もやもやしたものを抱えていた。

「私がサイトを好きだったのは、間違いのないと思う。

でも、今でも、まだ、わからない。サイトへの気持ちだが、恩人への

憧れなのか、異性への恋なのか。

ひとつだけ言えるのは、彼がルイズと婚約したと聞いた時、すごく、寂しく思った……それだけ」

「……大丈夫よ、タバサ。きっとサイトよりステキな人が、あなたの前に現れるわ」

夏の暑い日差しの下で、しっとりした空気をまとわせて、ふたりはアパートに帰りついた。

「じゃ、私はちょっと、夕食の下ごしらえをしておくわね。タバサはどうする？」

「ん。サイトの姿をこっそり覗き見ながら、自分の心を落ち着けることにする」

「……インターネット・サイトの方よね？ 平賀サイトじゃなくて」
タバサがノートパソコンを立ち上げるのを見て、ほっと一安心したキュルケは、エプロンを身につけ、キッチンに向かった。

冷やし中華は、さほど難しい料理ではない。ただ、美味しく食べる条件はシビアだ。

めんも具も、スープも、しっかりと冷えた状態で頂くのが最も美味しい。そのため、調理は夕食直前にしたのではよろしくない。昼間のうちに原型を作っておき、冷蔵庫で一時間以上は冷やす必要がある。

まずは錦糸玉子を作る。溶き卵をフライパンに薄く流し、さっと焼いてクレープ状の玉子焼きを作るのだが、その際に、キュルケは『フレイム・ボール』を唱える 『ファイヤー・ボール』ではいけない。あれは発射した後の動きを操作できない。『フレイム・ボール』なら、発射後も動きを自由に操れる。発射した火球を、ガスコンロの上に浮かべて固定し、そこにフライパンをかざすことによって、彼女は焼きの調理を行うのだ。

この『フレイム・ボール』調理法、ガス代をほぼ百パーセント節約する上に、火球の勢力を極小に維持しつつ、その場から動かさないようにしなければならなかったため、メイジとしての魔法の修行にも一役買っている。

一日三回食事前に、火魔法の精密な制御訓練をナチュラルに行ない

続けた結果、とつとつスクウェアに開眼したキュルケであったが
いったいどんな修行をしてたどり着いた境地であるのか、人に説明す
るのは、ちょっと気恥ずかしくてできないのだった。

絶妙な火加減で、薄くしつかりとした薄焼き卵を作り、それを菜ば
しで丁寧に剥がして、まな板の上に重ねていく。

ある程度枚数が揃ったら、包丁を使って、そばやうどんを切るよう
に細切りにしていく。添える手は猫の手。太さもばらつかないよ
うに、一定の間隔で。たん、たん、たん、たん。刃がまな板を叩く
音は、軽快だ。キュルケはすっかり、料理の一般的な技術をものにし
ていた。

（そついえば、ここに来る前、シエスタに料理の仕方を習ったのよね
……。

こつちじゃ、専属の料理人なんていないし、外食より自分で作った
方が絶対安いつてサイトが言うから。

色んなことを教わったけど……それで今、こつしてちゃんと料理が
できてるんだから、シエスタにも感謝しないとね……）

キュルケの脳裏に、トリステイン魔法学院の厨房で教わった、シエ
スタの料理講座が思い出された。

『では、まずは鶏肉料理からいきましょう、ミス・ツェルプストー。
ここに新鮮なニワトリを用意いたしましたので』

言いながら、シエスタはコケコケ言いながら暴れている元気な雄鶏
をキュルケの前に持つてくると、流れるような動きで、その首の骨を
へし折った。

『じつやって、一気にしめちゃって下さい。逆さに吊るしておいて、鉈
で首を落とす方法もありますが、これは周りに血が飛び散るので、水
場が近くにあるところでないで、ちょっとオススメできません。』

で、死んでぐったりしているニワトリの羽を、こつという風にむしつ
て……力を入れて、根っこから一本残らずやっちゃいます。それか
ら、包丁を使って内臓を取り出していくんですけれど』

黒髪の清楚なメイドが、笑顔でニワトリをばらばらにしていく光景
を脳裏に浮かべながら、キュルケはそつと心の中で呟いた。

(「ゴメン、シエスタ……あなたの野性的な調理法、こっちで全然使っていないわ……」)

鶏肉は、すでに解体された状態で売っていたのである。煮炊きするためのかまどを、道端の石ころを積み上げて組み立てる方法も、どنگりをすりつぶして水にさらしてアク抜きする知恵も、日本という文明社会では意味を持たなかった。

向こうでシエスタは、今日も元気に鶏をしめているのだろうか。今度、地球のとり胸肉(百グラム三十九円)のパックを、お土産に持って帰ってあげよう、と、キュルケは思った。

「よし、できあがり、と」

ふたつの冷やし中華の皿にラップをかぶせて、冷蔵庫におさめて、キュルケは満足そうに頷いた。

キュルケの分は普通サイズで、トッピングも普通。タバサの分は二人前の大きさの上、トッピングはガリアスペシャルだ。ちょっと禍々しい感じがするが、食べるのは自分ではないので、まあいいやと見なかつたフリをする。

エプロンを外して、六畳の広大なリビングに戻ると、ちゃぶ台というアンティーク色豊かなテーブルの上で、タバサが熱心にノートパソコンのキーを叩いていた。

青髪の少女の表情は真剣そのもので、キーを叩く手の動きも、某情報統合思念体の対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスもかくやと思われるような滑らかさだった。

キュルケが後ろから近付いても、気付く様子すらない。何をしているのかしら、と思いつながらさらに歩み寄ると、なにやら口の中で、小さく途切れ途切れの言葉を呟いているのが聞こえてきた。

「……サイト……大好き……」

……たとえ、結ばれなくても……せめて、一夜の夢の中だけでも一緒に……」

(あら。あつらひらひらあ〜?)

キュルケは無言でにんまりと微笑んだ。

(「」の子ったら、意外にロマンチックなところもあるのかしら。

眩きからして、さては自分とサイトの恋愛物語でも書いているのね？
自分の恋心に、決着をつけるために……。

前に、自分の復讐心を満足させるためだと言って、ジョゼフ王とカステルモールさんのとんでもない小説を書いてたけど……自分とサイトをモデルにして書くのなら、さすがに爽やかな、正統派の恋愛小説でしょうね。

どれどれ、どんないちゃつき方をしているのか、恋愛巧者のお姉さんがちよつと見てあげるわ（

そこからは忍び足で、気配を殺しながら、キュルケは慎重にタバサの背後に腰を下ろした。

そして、タバサの肩越しに、青白く光る液晶の画面を覗き込み。

「サイト！ 女性というのは、みんなどうしようもなくわがままな生き物なんだ！ 僕はそれがはつきりとわかったよー！」

「おいおい、どうしたんだよギーシュ。夜も早いのに、もう飲みすぎたのか？」

ギーシュ・ド・グラモンの、バラと青銅の芸術品に囲まれた華美な部屋の中で、サイトは親友の涙ながらの愚痴を聞かされていた。

金髪の巻き毛の少年は、ボトルから直接グラスにワインを注ぐと、ぐつと一気飲みをして、サイトに泣きつく。

酔いが回って、ろれつが回らなくなっているが、要するに言っているのは、モンモランシーとうまくいっていないという意味のことだった。こちらは彼女のわがままに付き合っているのに、こちらははずっとおあずけを食わされている。そして、女性たちが主張するには、それが彼氏としての甲斐性というもので、当たり前なのだという事なのだ。

「僕は自信がなくなってきたよ。モンモランシーのことはもちろん愛しているわ。」

でも、少しずつ彼女との間に、溝ができていような気がして……

僕と彼女の『当たり前』が、どんどん違つものになつてしまつている気がして……いつか、世の中のうまくいっていない夫婦のように、相手に疎ましさを感じるようになってしまふかもしれないと思うと……やるせなくて仕方がない」

「そっか……」

サイトは、親友のその苦悩を理解できたようで、力強く頷くと、ギーシュの肩に手を乗せた。

「よし、わかった。だったら、俺が何とかしてやる」

「何だつて？ サイト、きみには、僕の悩みを解消する方法がわかるというのかい？」

「ああ。それほど難しいことじゃない。お前が、女の気持ちを知ればいいんだ。そして、それを俺が教えてやる」

「ふふん？ それは聞き捨てならないね。サイトが僕に、女性の気持ちを教えるつて？」

バラとしてたくさんの女性を楽しませてきた僕に、きみが教えられることなんて……えっ？」

次の瞬間、ギーシュの華奢な体は、サイトの腕の中に抱きしめられていた。

「ギーシュ。俺が、お前に、女の気持ちを教えてやる。

女を楽しませた経験はあつても、女として扱われたことはないだろ……？」

俺は今夜、お前を女として扱つてやる。お前も、女としてふるまえば、きつと女の気持ちだが、本当の意味でわかるはずさ」

「な、な、な、何を言つてるんだ、さ、サイト……？」

僕は男だ。ほ、誇り高く勇敢な、グラモン家の四男だ……そんな僕を、女扱いなんて……できるはずがない」

どぎまぎしながら言い返すギーシュの顔を、正面から見つめて、サイトはにこやかに言う。

「ははっ、大丈夫だつて。お前、すっごくキレイだぜ……女の子って言われても、疑えないぐらいにさ」

実際に、その時のギーシュは中性的な魅力を発散していた。まつげ

の長い、大きな目。瞳は潤み、恥ずかしそうにサイトを見つめている。頬はもちろん、耳まで真っ赤なりんご色に染まり、桜色の小さな唇が、甘く熱い吐息を漏らしている。

金色の巻き毛は天使のようで、フリル豊かな白いシャツが、また女性っぽさを演出している。

そして　抱きしめた者にしかわからない、折れそうな細い体守ってあげたくなる儂さを、サイトはギーシュに感じていた。

「な、な、な……」

動揺と、さらにもうひとつの意外な感情に心を乱されて、ギーシュはろくに言葉も発せなくなった。

もうひとつの感情とは、ときめき。サイトの体温に、安らぎを感じている。サイトの眼差しに、胸の高鳴りを感じている。

本当に女性になったかのように、ギーシュはサイトの抱擁に身を任せていた。

「ほら。今夜は俺が彼氏役だ。甘えて、何でも言っていいいんだぜ。

女ってわがままな生き物なんだろ？　お前のわがまま、俺が何でも聞いてやるよ……」

「だ、ダメ……やっぱりダメだ、サイト。僕ときみは、友達じゃないか。お互い、恋人は別にいるのに……こんなことをしちゃ……あんっ」

サイトがぐつと頭を沈め、ギーシュのシャツの合わせ目から覗く首すじに、唇で吸いついた。

ちゅう、と、一瞬のキス。しかしそれでも、サイトが顔を上げた時には、ギーシュがサイトの所有物になったという証が、ピンク色の小さなキスマークが、白い肌の上に刻まれていた。

「ギーシュ。親友が、恋人より親しくしちゃいけないって決まりでもあるのか？」

この言葉で、ギーシュ・ド・グラモンは落ちた。

大好きな、自分のことを包み込んでくれる親友の背中を、そっと抱きしめ返す。そして、震える唇で、サイトの耳に囁いた。

「灯り……消して。それだけが、僕のわがままだ。

それからは、きみに好きにされたい……きみのために尽くす、ワル

キユーレになりたい……」

「お前……いい男だよな、ギーシュ……」

サイトは手を伸ばして、ランプの灯りを落とした。闇が、優しくふたりを覆った。

「……………ギーシュは抱かれながら、サイト大好きと繰り返し……」。

結ばれぬ運命とわかっていながらも、ふたりはせめて一夜の夢の中で愛を誓う……まるで儂く美しい、可憐なバラのような恋……ふふ、うふふふふふ」

「……………」
キウルケは疲労感に、ぐったりとうなだれた。

その気配によやく気付いたタバサは、顔を赤らめながら、慌ててノートパソコンを畳んだが、キウルケはそこに少女らしい初々しさを感じなかった。むしろ、広大な腐海の広がりを感じた。

「……………見た？」

「……………見た」

タバサの問いに、キウルケは機械的に返事をする。

恥ずかしいものを見られた眼鏡の文学少女は、呼吸を整え、冷静でいようと自分に言い聞かせながら、静かに言い訳を始める。

「キウルケ。勘違いしないで欲しい。これはあくまで、私の失恋の傷を癒すための、自分の気持ちに決着をつけるための儀式。」

そう、ルイズと結ばれる彼のことを諦めるために、私の心を慰められる恋愛の形を……………」

「……………というか、タバサ……あなた、こないだもジョゼフへの復讐とかがあって、その手の小説書いてたけど……………」。

要するに復讐とか気持ちの決着とか関係なくて、あなた自身がそのジャンルが好きだってだけじゃ……………」

キウルケのおずおずとした指摘は、タバサの急所を見事に突いた。少女は錆びついたブリキ人形のように、ギギギときこちなく、赤髪

の親友から目を逸らした。

「……………」

「……………」

みーん、みーん、みーんと、窓の外でやかましくセミが鳴いている。遠くから、電車の走るかたたん、かたたんという音が響いてくる。しかし、ふたりのいる六畳の部屋は、妙に静かだ。

「……………タバサ。おやつ時だし、カスタードメロンパン、食べたら？」

「……………食べる」

美味しい食事は、人を笑顔にするという。

タバサがカスタードメロンパンを食べることで、この気まずい空気が温かくほぐれることを、キュルケは願っていた。本気で。心から。始祖に真剣に祈るほどに……………。

(それにしても、まさか、毎回途中で挟まるんじゃないでしょうね……………
? タバサのこの創作って……………)

ふと、そんなメタなことを考えるキュルケだった。

シエイクスピアを夢見て

ハルケギニアにおいて、物語と言えるものは少ない。

始祖の御技や魔法について研究した書物は数あれど、娯楽小説と呼ばれるものは、六千年の間に全くと言っていいほど発達しなかった。タバサの好む『イーヴァルデイの勇者』などは、数少ない例外である。そして、そんな物語供給の乏しい世界から、地球にやってきた本好きの少女は、今。

「……………」
眉ひとつ動かすことなく、古本屋さんの本棚の間を、たゆたうように歩き続けていた。

あっちへふらふら。こっちへふらふら。

知らない人が見れば、退屈して手持ち無沙汰になっているように思うかもしれない。

しかし、付き添いで一緒に来ていたキュルケにはわかっていた。親友の心の中が。

(ああ、タバサったら、あんなに浮き足立っちゃって……………)

そう、タバサは興奮していた。ワクワクという言葉が、瞳の中で踊っている。

タバサは始祖に祈るように、天を見上げた。天井の蛍光灯が眩しいが、それすらも彼女には神々しく思える。

何度来ても、この場所を感じる印象は同じだ。

「……………それが、私の聖地」

厳かにタバサは呟く。この古本屋は全国にチェーン展開しているので、タバサにとっての聖地は、日本中に数百カ所以上あるのだ。た。

第三話 シエイクスピアを夢見て

キュルケとタバサは、毎月の生活費の中から、決まった額をおこづ

かいとして手に入れていた。

この小さな金額を、タバサは意外なことに、全く貯めることなく
パーッツと使ってしまう。宵越しの金を持たない江戸っ子を気取っ
ているわけではない。単純に、欲しいものがたくさんあるのだ。

「読んでも、読んでも、未知の本が尽きることがない……地球、なんと
素晴らしい情報産業世界」

岡本綺堂の捕物帳を、どさどさとカゴに詰め込みながら、タバサは
その近くの野村胡堂にも視線を流す。

彼女は月初めにもらうおごづかいから、インターネット料金を引い
た残りの全てを、古本の購入に費やすのだった。イーヴァルディはも
ちろん心の書だが、こちらに来て触れたミステリーは麻薬であり、S
Fは酒であり、時代劇ははしばみ草だった。タバサ用に部屋の間置
いてあるカラーボックス(ホームセンターで九百八十円で購入)には、
今や地球産の古本が溢れんばかりにおさまっている。

普通の書店には、まだ行ったことがない　なぜなら、新本より古
本の方が安いからである。ことによると八百円以上する本を百円で
買えることもあるので、金欠に喘ぐ彼女たちにとって、『獵場』は選ぶ
余地がなかった。

「素晴らしい。この古本屋、F市では見つけれなかった『半七捕物
帳』の三巻以降が置いてある。この際だから、七巻まで手に入れてお
きたい……噂に名高い『銭形平次捕物控』も……これは巻数が多い
……でも、どうせなら買えるだけ……!」

「ストップストップ、タバサ!　もうちょっと考えながら買いなさい。
慌てても何もいいことないわよ?」

「それは違う。自分が買わなければ、誰かが買うかもしれない。誰か
が買って在庫が切れたら、次に誰かが売るまで、仕入れられることは
ない……それが古本屋のシステム。油断はできない」

キュルケの制止に反論するタバサの表情は、ガリア北花壇騎士とし
て、命の危険すらある任務に挑んでいた時よりも真剣であったとい
う。

キュルケはそんな親友の様子に肩をすくめたが、タバサの買い方は

タバサなりの厳選に厳選を重ねた買い方なので、それ以上深く注意することはなかった。本棚に並んでいる本を、一列一列丁寧にチェックしていくタバサを横目に、自分も面白い本はないかと、適当に売り場を物色し始める。

キュルケも、読書する趣味が全くないというわけではない。暇な時にタバサの買ってきた本を読んでみたところ、思いのほか面白かったので、夜寝る前の穏やかな時間は、ナイト・ランプのオレンジ色の光の下で、小説のページを静かにめくる知的なレディとなる。ただ、タバサが自身のおこづかいで買ったものを、自分がただで読むのは少々気が咎めたので、タバサの買い物と一緒に付き合ひ、自分も本を買って、かわりばんこに読もう、と決めたのだった。

「前にタバサがオススメしてくれた、『銀河英雄伝説』ってのは面白かったわねえ。登場人物の名前もゲルマニア風なのがなくて、わかりやすかったし。

次は何を読もうかしら。ああいう物語って、SFっていうのよね？
だったら、同じジャンルを選べば大丈夫よね……SF、SFはと……あら、『月は無慈悲な夜の女王』ですって。タイトルからしてセクシーじゃない？ 私、これ買っちゃおうって」

「それはもう家にある。ダブらせてはダメ」
時代物コーナーの隅にいたタバサが急に振り向いて、目ざとく指摘する。

「その作品はハインラインの名作。帰ったら、ぜひ読むといい。

でも、もしあなたが何か本を買おうと思うなら、買う前に私に言うて。買っているものかそうでないか、確かめるから」

「あら、それは気をつけなきゃね。じゃあ別のを探さなきゃ……ねえ、このSFコーナーで、あなたが買ってないものって、たとえばどれ？」
「未購入で、かつ私が気になっているのは、ルーディ・ラッカーの『セックス・スフィア』。キュルケのお財布で買ってくれるのなら、よろしく頼みたい。私が買うよりは、店員さんに変な目で見られなくて済む気がする」

「……いや、私もそれはちょっとためらうわ。何そのダイレクトすぎ

るタイトル」

「マッドでダイレクトだけど、本格的なSFですよ、と、どこかの誰かが思った。」

「それに、SFは科学と呼ばれる非常に底の深い学問を、かなりの深度で扱ったものも多い。ものによっては、科学的造詣の浅い人間には理解できない作品もある……その辺に気をつけなければ、大変なことになる」

「ああ、確かに、『銀河英雄伝説』でも、光年とかワープとか理解するのに、ちよつと時間がかかったわねえ。あれは人間ドラマと国家間の攻防が前面に押し出されてたから、苦勞もちよつとで済んだけど。」

「となると、もっとシンプルに理解できる、人間ドラマ系が私向きってことね。ミステリー小説とか、愛と欲望の絡み合う人間ドラマの坩堝だって、前にタバサ言ってたから、そっちのジャンルで探してみましよう。ねえ、ミステリーで買ってほしい作品はある？」

「太田忠司の、『狩野俊介』シリーズがあるかどうか、見てきて欲しい。『月光亭事件』から、『玄武塔事件』までは読んだから、それ以降があれば買っておきたい。」

「このシリーズはきつと、キュルケも気に入ってくれると思う。何しろ主人公が、けなげで賢く可愛らしい少年と、さえないけれど思いやりのある中年男性の二人組。ふたりのやり取りが魅力的で、想像の翼がとても広がる」

「……人物描写に優れているということよね？ キャラクターが生き生きしているという意味よね、タバサ？」

「少なくともボーイズラブ要素はありません、と、またしてもどこかの誰かが思った。」

「あと、アガサ・クリステイーもかなり良い。ハヤカワのクリステイー文庫を二、三十冊読んでみたけど、はずれがなかった。『アクロイド殺し』、『オリエント急行の殺人』、『ABC殺人事件』、『邪悪の家』や『ナイルに死す』などのポアロものもいいし、キュルケならばトミー&タペンスの冒険モノを好みそう。ノン・シリーズの『チムニーズ館の秘密』、『そして誰もいなくなった』、『シタフォードの秘密』などは人を

選ばない。ぜひ読むべき。

まだ持っていない作品で、狙っているのは『ねじれた家』、『なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか?』、『謎のクイン氏』、『火曜クラブ』。海外作品の棚に、それらのタイトルがあるか知りたい。あつたならば、ぜひ確保を。

……待つて、海外作品の方を見るなら、ジョン・ディクスン・カー（あるいはカーター・ディクスン）もあるかどうかチェックして。『爬虫類館の殺人』や、『白い僧院の殺人』、『ユダの窓』は素晴らしかった。探すべき目標は『三つの棺』、『プレーグ・コート』の殺人、『皇帝のかぎ煙草入れ』。それと、エラリー・クイーンも忘れてはならない。『ドルリー・レーン』シリーズが面白かったから、次は『国名』シリーズに手を出したい。『ローマ帽子の謎』、『フランス白粉の謎』、『オランダ靴の謎』、『ギリシア棺の謎』など、国の名前がつく作品ばかりだから、探すのに手間はかからないはず。ピーター・ラヴゼイも必要。名作と名高い『偽のデュー警部』を読んでみたい。『バースへの帰還』や『猟犬クラブ』の面白さからしても、とても期待できる。E・D・ホツクの著作もあるようなら、あるだけカゴに入れてきて。『サム・ホーソン』シリーズは鉄板。『怪盗ニック』も、『サイモン・アーク』シリーズも押しなべて上質。持っている作品があるなら、穴を埋めておきたい。それからチェスタトンの『ブラウン神父』シリーズが……』『クリステイーだけ見てくるわ』

いつ尽きるかも知れないタバサのリクエストの嵐から、キュルケはさつと身をひるがえして逃走した。

今日着ているTシャツの胸に燦然と輝く「サラマンダー」よりはやい」の文字はダテではない。

五分ほど海外コーナーをうろついたキュルケは、運良く見つかることのできた『火曜クラブ』と『なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか?』を手に、タバサのところへ戻った。

「タバサ。言ったの、ふたつ見つけたわよ……って、あなた、カゴの中身、またずいぶん増えてない?」

「気のせい」

気のせいではない。商品がひとつのカゴに入りきらなくなって、ふたつ目のカゴを足もとに置いていくぐらいなのだから、言いわけの仕様がなない。

ホントにおこづかい分だけで足りるのかしら、といぶかりながら、キユルケはふたつ目のカゴに遠征によって得た収穫をおさめた。

古本屋で大量に本を売る人は珍しくないが、大量に買っていく人はそれほどいない。だから、この大人買いを試みようとしている小柄な客は、なかなか周りの目を引いていた。

特に、タバサたちのすぐそばの棚で、商品の整理をしている店員のリョウコさん（アルバイト二年目、十九歳）は、愉快的気持ちで、ふたりの外国人の会話に聞き耳を立てていた。

店員として、たくさん商品が売れることを喜んでいるだけではない。ひとりの本好きとして、彼女はタバサの語る本のチョイスに、心の中で満足げに頷いていた。

（クリスティにJ・D・カー、クイーンときたか。なかなかセンスがいい。）

太田忠司も実力派だし、カゴの中に見える時代物も、優れたミステリー作品だ。あの青髪の少女、幼く見えるが、ミステリーを味わう舌は肥えているらしいね……）

ライトノベルコーナーの『涼宮ハルヒ』シリーズを順番通りに並べながら、リョウコさんはタバサの動向を横目で追う。青い小さな後ろ姿が、現代日本コーナーに移動した。どうやらこの客は、まだ買い物をやめないつもりでいるようだ。

さて、さすがにカゴひとつ分を超える量の商品をストックしていると、さすがのタバサも財布の中身が心細くなってくる。できるだけ多く、しかし予算の範囲で買い物をするために、欲しいものでもいくつかは諦めなければならない。

今、タバサの頭を悩ませていたのは、松本清張の『ゼロの焦点』と、鮎川哲也の『ペトロフ事件』のどちらを買うべきかという問題だった。

松本清張も鮎川哲也もいい。それはわかってる。松本清張の『砂の器』や『点と線』は渋くて素敵だった。鮎川哲也の『人それを情死

と呼ぶ』や『黒いトランク』は切なくて印象的だった。どちらも期待感が高い。迷う。どちらか片方を買って、来月残った方を買いに来る、というのは簡単だが、先に述べたように、来月にも同じものが棚に並んでいるかは、完全に運なのだ。誰かに買われてしまったら、そこで縁が切れてしまう。

「キュルケ、あなたに聞きたい。このふたつでは、どちらが読みたい？」

弱りきったタバサは、キュルケに相談することにした。

「二冊の文庫本を差し出されたキュルケは、裏表紙のあらすじを読んで、困ったように腕を組んだ。

「うーん、どっちかしらね……両方とも情感たっぷり面白そうだけど……内容が難しそうでもあるのよねえ……」

「それは仕方がない。ふたりとも本格推理小説界の雄。複雑なプロットは推理小説の肝だし、その複雑さが結末で美しく解きほぐされるのが、推理小説の醍醐味。難しさを忌避すべきではない」

「うーん、そうじゃなくてね。私もちょっと前に、『コナン・ドイルを読んだから、推理小説がどういうものかはわかってるつもりよ？』

「そうじゃなくてね、トリックの種類というか……ほら、時刻表トリックってあるじゃない？あれとか、日本の乗り物事情に慣れてないから、私にはいまいちピンと来なくて」

「ああ……」

キュルケの言葉に、タバサと、少し離れたところにいたリョウコさんが、同時に頷いた。

「確かに。私たちの国では、乗り物の時間はこの国みたいに、きっちり決まっていなかった」

「でしよっ？ フネだって、『準備ができたなら出発する』とか、『風がちょうどいい時に出発する』みたいな感じだったもの。時間を決めても、あさっての昼間とか、夕方とか大雑把な言い方だし」

（ふーん……日本の時刻表の正確さには、外国の人はみんな驚くって言うけど、本当なんだなあ……）

ふたりの会話を、リョウコさんは興味深く聞いていた。遠い国の話

を聞くことは、それがどんな些細なことでも面白いものだ。

キュルケは、第三者から注目されていることなど、まるで気付く様子なく続ける。

「それにねえ……ほら、覚えてるタバサ？ ルイズたちと一緒に、ラ・ロシエールの港から、アルビオンに行こうとしたことがあったでしょ」

「あった」

ふたりの友人であるルイズ・フランソワーズが、アンリエッタ王女の密命を受けて、アルビオンのウエールズ皇太子のもとへ、とある手紙の回収に向かった時の話である。その任務に、キュルケとタバサもついていったのだ。途中、ラ・ロシエールの旅館【女神の杵】亭で、賊からの襲撃を受けたので、キュルケたちが囷になって敵を引きつけ、その間にルイズたちが空飛ぶフネでアルビオンに向けて出発する、という作戦を取ったことがあった。

「あとから聞いた話なんだけどね。あの時も、ルイズはサイトやワルド子爵と一緒に、貨物船マリー・ガラント号で出発しようとしたけれど、その時、まだフネは出発準備ができてなかったらしくって……」「そう聞いた。でも、何とかなったはず」

「ええ。ワルド子爵が船長と交渉して、すぐに出発してもらったことになったらしいのよ。貨物と同等のお金を出すって言ったことが、やっぱり一番効いたんだろうと思うけど」

（ほほう。子爵ということとは……彼女らは、まだ貴族制の残っている国から来たのかな。）

準備ができていない船を、お金の力で前倒しに出港させるなんて、相当なお金持ちだな……）

リヨウコさんがそんな風に、異国の貴族の太っ腹ぶりに感心していると、キュルケはさらに一言を付け加えた。

「まあ、船長が出港を決めた、お金と同じくらい大きな理由は……フネの燃料（風石）がなくなっても、ワルド子爵が代わりに貨物船を動かすって保証したからなんだけどね」

（……………？）

リョウコさんは、その言葉の意味がよくわからずに首を傾げた。

対してタバサは、こくこくと二回頷いて、同意を示した。

「あのワルド子爵なら、（風のスクウエアだから）人力だけで貨物船を動かすことは可能。船乗りにとっては、非常に心強い」

「ええ。でも、だからこそ、時刻表トリックは私にはあまり馴染めないのよ……人ひとりの（魔法の）力で、何人も人間と重い貨物を載せたフネを、海の向こうのアルビオンまで運べちゃうのよ？ だったら動く時間が決まってる船や電車なんか使わなくなったって、好きな時にその乗り物に負けない速度で、どこにだって移動できちゃうじゃないの」

そう言っって肩をすくめるキュルケ。

その後方数メートルの場所では、リョウコさんがイメージに苦しんでいた……彼女の頭の中には、まだ見ぬワルド子爵（空想の中では、筋骨隆々たるゴリラのような大男として描写されている）が、ぶるわああああと気合いの雄叫びを上げながら、二本のオールで水をかき、貨物船をむりやり前進させている光景しか浮かばなかった。

「それは特殊な例。誰にでもできることじゃない」

「誰にでもできることじゃなくても、ハルケギニアにはできそうな人が何人もいるじゃない？」

タバサだっってそうよ。あなたのシルフィードなんか、スピードも乗り心地も、日本の車や電車に負けないでしょ」

キュルケのその言葉に、とりあえずリョウコさんは謎のワルド子爵（どう考えても人間の筋力では不可能なことをやってのける人物）についての思考をやめた。その代わりに、小柄な青髪の少女　タバサの持つ「シルフィード」と呼ばれる乗り物について、考えを巡らすことにした。

（ニッサンかトヨタあたりの車に、そういう車種があったような……いや、日本の車に負けないと言っているから、外国のメーカーなんだろうな。きつと大きくて、馬力のある車に違いない……気になるのは、あの小さな子でも

運転できるというニュアンスのことを、もうひとりの女性が言って

いるということだ。年齢が低くても、免許の取れる国……いや、あんなに小さく見えて、実はもう二十歳過ぎているとか？」

「確かに速いことは速い。しかし、問題も多いことは、あなたも知っているはず」

タバサは、小さなため息をついて、「シルフィード」の問題を指折り挙げ始めた。

「まず、きゅいきゅい鳴きっぱなしでうるさい」

（ブレーキ音か？ いつもキーキー言つたいうことは、少し危ないな。修理した方がいい）

「物覚えも悪い。どこどこに行つてと命令しても、かなりの確率で方向を間違える」

（ははあ、搭載しているカーナビが古いんだな。昔のやつは、入力する地図が自動で更新されないから、ちよつと道や建物が工事で作り直されると、とんちんかなルートへナビしてしまうというからな……）

「それに、燃費が悪過ぎる」

（外国産の車は、大きいだけあって燃料をよく食うというからなあ……）

「毎日豚とか、鳥とかのお肉をあげないと動かない。しかも十キロ以上」

（そうそう、お肉は大切なエネルギー源だからしっかり食べないと……つて、んん？）

リョウコさんの頭では、ガソリンスタンドの店員が車の給油口に生肉を押し込んでいた。

「それを思うと、こちら（地球）の車はとても安上がり。一台手に入れられるなら、あちら（ハルケギニア）に持って帰りたいくらい」

「……ええ、車は私も欲しいけど、とりあえずそのぐらいで乗り物の話はやめましょうか。」

「なんだか遠い国で、誰かさんが涙目でか細く鳴いているような気がするから」

地球とハルケギニアに別れていても、メイジと使い魔の絆は切れる

ことはない。感覚共有によってタバサの発言を聞いていたハルケギニアのシルフィードは、ニホンのクルマと呼ばれる騎乗動物に対して、「きゅい……この泥棒猫……！」と、怒りに震えて呟いていた。ちなみにこの日のタバサのTシャツの文字は「サスペンスの女王」であった。

「まあ、そんなだから、私は時刻表トリックものはどうもねえ……タバサは、わりと気にせず読めるの？」

「全然大丈夫」

「そう。で、両方とも欲しいのよね？」

タバサはこくりと頷く。その目は左右の手に持たれた本の間を往復しっぱなしで、どちらかを諦めるには長い長い年月を必要とするだろう。

「うん、わかったわ。じゃ、タバサは『ゼロの焦点』を買いなさい。私が『ペトロフ事件』の方を買うから」

「……いいの？」

「いいのよ。今月はお洋服とか買つ予定がないから、少し余裕があるしね。」

その代わりに、家に帰ったら『月は無慈悲な〜』とか、タバサおすすめのやつを読ませてね。もともと、タバサと本を共有したくて、ここについて来たんだから」

「キュルケ……ありがとう」

こうして問題は解決した。

ふたりは買い物袋三つ分にもなる量の本を清算し、満足な気持ちで古本屋を出ていった。

その背中に、ありがとうございました、と声をかけながら

リヨウコさんは、貨物船を人力で動かせる人がいたり、食肉を燃料にする車があったりする謎の国の幻影に、まだ頭を悩ませていた。

その様子に違和を感じた店長が、部下を気づかい声をかける。

「リヨウコ君、大丈夫かね？ さっきから、しきりに首を傾げているよつだが」

「ああ、すみません店長。ちょっと考え事してました。」

……あの、ちょっとお聞きしたいんですが……どこかの国で、豚肉や鶏肉を燃料にして走る乗り物が開発されたってニュース、聞いたことないですか？」

「はあ？」

さすがにこの質問には、店長もリョウコさんと同じく首を傾げざるを得なかった。

「何を言ってるんだね。ファンタジー世界で、ドラゴンに騎乗するわけじゃあるまいし」

「そ、そうですよね……あはは……… いったい、何と聞き間違えたんだろう、私………」

肩を落とすリョウコさん。まさか、店長の言葉がドンピシャで正鵠を射ていたなどは、気付きようのないことだった。

「図書館で本を借りられたら、一番良かったんだけどねえ」

帰り道、アパートへ続くいつもの石段を登りながら、キュルケはひとりごちた。

その意見に、タバサは頷く。図書館もいいところだと、彼女は知っていた。あの公共施設に出かけ、新聞や雑誌を読んで日中を過ごすことは多い。借りて帰りたいと思う本も、もちろんたくさんある。

しかし、残念なことに、戸籍を持たない彼女たちには、貸し出しカードを作ることができなかったのだ。

「あっちが利用できていたら、きっとものすごいお金の節約になっていたでしょうにね………」

それも確かなので、タバサは再び頷く。ただし、その次に、「でも」という言葉を付け足した。

「でも、古本屋を利用し始めたことを、後悔したりはしない。

あそこもあそこで、いい場所。誰かに不用とされた本が集まり、必要に思う人のところへ買われていく。知識の流転と拡散………これはとても素敵なことだと思う。学問が貴族だけのものとして留まって

いたハルケギニアとの、大きな違い」

そんな壮大なもののかしら、と思いつつも、思い当たる節がないではないので、キュルケも頷く。

ハルケギニアでは、平民のほとんどが文字を読めず、学問とも縁がなかった。人間社会において、学はそれ自体が強力な武器である。貴族が平民を六千年の間支配してこれたのも、魔法の力もあるだろうが、学問の力によるところも相当に大きかったはずだ。

書物自体、向こうでは一冊一冊が、ちょっとした宝物並みの値段だった。それを庶民が、食事一回分以下の値段で

買ってしまう地球という世界は、やはりすごいのだろう。

「それに、古本屋には、図書館にないマンガがたくさんある。

「こちらに来てすぐの頃、剣心×左之助の薄い本を手にした時の衝撃……今でも忘れられない」

「ええ……それを思うと、あなたを意地でも図書館だけに縛りつけておくべきだったと、心から思うわ……」

タバサが古本屋の中で徘徊したのは、小説コーナーだけではない。マンガも結構たくさん買ひ物力ゴに入れられていたのだが、キュルケはそれについて話題にしたくないため、ずっとスルーを決め込んでいた。

ついでに言うと、タバサが押入れの天井裏に薄い本用の隠し本棚を設置していることも、毎日掃除を欠かさないキュルケは気付いている。お互いの友情のために、そのスペースは今後も話題にされることはないだろうが、そろそろ本の重みで天井がミシミシ言い始めているので、いつかは何らかの話し合いがされることになるだろう。

「それにしても、あれだけ本がたくさんあるってことは、それを書く知識人もたくさんいるってことよねえ……」

まあ、全部が全部、書くのに深い学識を必要とする本ってわけじゃないでしょうけど……ふふ

キュルケが突然、口元を小さく隠して笑ったので、タバサはどうかしたのかと、その顔を見上げた。

「ああ、大したことじゃないのよ。本を書く人がたくさんいるんなら、

私やタバサも、もしかしたら何か本を書けば出版してもらえるかも、とか思っちゃったの。

ほら、私、恋歌なら上手に書く自信あるし……自分の詩集とか出せたら、すっごく素敵だと思わない？」

「ああ……確かに、あなたはよく書いていた……」

魔法学院にいた頃は、気になる男友達ができるたびに恋歌をつづり、それをタバサに見せていたキュルケだった。

情熱的で官能的、なおかつ甘くメルヒエンな文体で書かれたそれは、しばしば無表情なタバサの耳を赤くさせたものだ。

「こないだね、ジャンのことをたたえる恋歌を書いて、あなたに見せたでしょ？ あれ、手紙に添えてハルケギニアの彼に送ったのよ。

彼が、メンヌヴィルから私を守ってくれた時のことを思い出すたびに、胸に情熱の言葉があふれてくるから、それを彼に伝えずにはいらなかったの。ジャンの中に潜む輝き　曇りのない鏡のようなジャンの澄んだ眼差し　太陽のような暖かさ……激しくはないけれど、ずっと寄り添ってお互いを磨いていきたいという気持ちを、うまく表現した傑作だったわ」

「えっ。え……あれ、送ったの？」

タバサがつつかえながら聞き返した。彼女には珍しく、その態度には動揺のようなものがあった。

しかし、それに気付かず、キュルケは胸を張って続ける。

「ええ。昨日、ジャンからお礼の手紙が届いたわ。手紙のところどころに濡れたような跡があったから、きつと感動して泣いてくれたのね。技術のことにしか興味がないようで、意外とロマンチックなところがあるのよお、あのヒト」

「ええと、たぶんそれは別の涙……いえ、何でもない。キュルケがそう思うなら、きつとそう」

タバサは心の中で、ハルケギニアの恩師に、同情の祈りを捧げた。

ちなみにキュルケがジャン・コルベールに送った恋歌の文章には、『輝く』が十二回、『光』が八回、『太陽のように』が二回、『鏡のよう』が二回、『磨きたい』が二回、『滑りやすい』が十一回も使用され

ていたという。

「それにタバサも、パソコンを使いこなして、結構長い小説を書いちゃうじゃない？」

あれ、何かの文学賞に応募したらどうかと思うのよ。描写は……その、えっと、全年齢向けに書き変えた方がいいんじゃないかとは思いますが、審査員の目にとまって賞とか取っちゃって、本にしてもらったりなんかしたら、お金もいっぱい入って、本も今よりたくさん買えるようになるわよー？」

「それは魅力的」

でも、事実上不可能だということを、タバサはやはり知っていた。

図書館で本を借りられないのと、同じ理由で。

「どちらにせよ、私たちには日本の戸籍がない。小説を投稿して、運良く賞が取れたとしても、本を出すまでにどこかで無理が出てしまうはず」

「あー……やっぱりそこよねえ……残念。社会のシステム化が徹底してるっていうのは、住んでいる人たちには便利なんでしょうけど、私たちみたいなには不便よね」

ぶっちゃけ不法滞在者なので、肩身が狭いのは仕方がないのである。

「私は本にできなくとも、趣味で小説を書けるだけでいい。」

インターネットで公開して、それなりに人気が出てきている……感想ももらえるようになったし、こないだはあるユーザーさんが、『挿絵を描いてもいいですか』と打診してきた。お金はもらえなくても、かなり嬉しい」

「へえ〜！ それって結構すごいじゃないの！ 気に入ってもらえてるって証拠よね」

「うん。今ごろ、頑張って描いてくれてるんだと思う。できあがった絵を贈ってもらえる日が、とても楽しみ」

氷のように動かないタバサの表情が、ほんの一瞬、春を迎えた桜のようにほころんだ。

同日、同時刻。〇市駅前の広場に、ふたりの外国人が立っていた。いや、この表現は正確ではない。ふたりの内ひとりには、厳密には人ではなく、亜人と呼ばれる存在であった。

砂色の長い髪を背中に垂らした美青年。その耳は、ピンと笹の葉のように尖っていて、長い。

ハルケギニアの東、砂漠の国ネフテスのエルフ、ビダーシャル。炎天に慣れた彼は、真夏の太陽の下でも額に汗を浮かべず、唇を引き締めてクールな表情だ。

「ジャン・ジャック。これが、サイト・ヒラガからもらった地図なのだが、目的の書籍屋はこちらの方角でいいのだろうか？」

彼は折り畳んだ紙を広げながら、連れ合いのヒゲの男、羽根飾りのついた帽子をかぶった精悍なジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドに尋ねた。

「ああ、間違いないな。バス・ターミナルと呼ばれる馬なし馬車の集合場所があれで、その横に石造りの空中歩道があると書いてあるから、進むべき道はあっちで正しいはずだ」

ふたりは頷き合うと、広場から移動し始める。彼らはともに男前で、しかも異国的な服装をしていたので、その様はまるで洋画のワンシーンのようだった。

「私はまだ、この国の言葉に慣れていない。店での交渉はきみに任せて構わないな、ジャン・ジャック？」

「ああ、日本語は完璧にマスターした。大丈夫だ。」

しかし、あなたから……いや、ネフテスの評議会から、地球での商取引に随行するよう依頼された時は、とても意外だったな。あなたたちは、偉い人間ほど、人間の文化を軽蔑していると思っていたのだが」

ワルドの言葉に、ビダーシャルは苦笑を漏らす。

「悪魔だと信じられてきた『虚無』は、我々に害を及ぼさなかった。そして、我々が接した人間たちは、それなりの礼儀をわきまえていた。もはや、人間を蛮人と呼び続けるのは、時代に合わなくなったという

ことだ。

それに、今の評議会の老人たちは、積極的に人間文化を取り入れようと考えている。テュリユーク統領がまず、この地球世界の『チハヤ・キサラギ』という偶像を崇拜し始めてしまっただけ……その肖像画を集めた画集、写真集とか言うらしいが、それを仕入れてこいとこの指示を承ったのだ。それだけ、今のエルフは人間に友好的だということだよ」

「そうか……しかしビダーシャル殿、そこは『偶像』ではなく『アイドル』と呼ぶのが、ニューアンスとしては正しいようだぞ」

「いや、私もそう思ったのだが、統領はそれで正しいと仰るのだ」

統領様は、如月千早のライブのチケットを、いつか何としても手に入れるべき神器的なものと解釈しておられるとか、いないとか。大いなる意志涙目である。

「それに、ジャン・ジャック。きみは異文化との交流にかけては、あちらの世界でも指折り数えられるほどの人間だ。我々エルフと地球人類との間も、うまく取り持ってくれるに違いないと期待している」

「……まあ、引き受けた任務は、責任を持って果たすさ。人を裏切ることは、もうしないと決めたんだ」

ハルケギニアでの数々の問題が解決されたあと、ジャン・ジャック・フランス・ド・ワルドは、ハルケギニアから一度去り、東方へ渡った。

母の遺志を継ぎ、聖地を目指した彼の目標はすでに達成された

母が恐れていたであろう大隆起問題は解決し、彼は求めるものがなくなった。しかし、目標を追う過程で焦りすぎ、自分の国を裏切ったという過去は消えなかった。

ロマリアに身を寄せたこともあったが、結局、裏切り者として知られすぎた彼には、ハルケギニアのどこにも居場所がなかった。唯一心を許したマチルダ・オブ・サウスゴータという女性とともに旅に出て、東の国にたどり着いた。

そこには、ハルケギニアにはない文化があり、慣習があり、争いがあった。そこで彼はいろいろなことを学びながら、関わった人たちの

争いをおさめる調停者として奔走した。一度、人を裏切った彼だからこそ、争う両陣営のそれぞれの立場に立ち、妥協点を探ることができた。一年も経たないうちに、彼は東方世界に知らぬ者はいない、争いを話し合いで解決する平和の使者となっていた。

半年前にはマチルダ嬢と結婚し、家庭を持った。家も建て、社会的安定と責任を手に入れた。

そんな時だ。ロマリアの知己から居場所を聞いたエルフが、ワルドのもとを訪ねてきたのは。

エルフの依頼ということ、最初は戸惑ったものの、家庭を持った彼には、それを守る責任があった。お金はあつてあり過ぎることはない。

それに、争う者たちの間に入るよりは、危険も少なそう。彼は仕事を引き受け、日本語を猛勉強し、そして今日、地球の地面を踏みしめた。

「しかし、ティファニア嬢が『世界扉（ワルド・ドア）』の魔法を使いこなせるようになっていてくれて、助かった。ルイズと顔を合わせるのは、まだ、何というか、気まずいものがあるから……」

「かつての婚約者だったそうだな。だが、もうお互いに別の相手と結ばれた身だ。いつかはあらためて挨拶に行つて、苦手意識を克服しておいた方がいいのではないか？」

「ああ、そうだな……彼女もこちらにいらつし、観光がてら足を伸ばして、ルイズの様子を見に行くのもいいかもしれない。時間もたっぷりあるのだし、な」

野心のために余裕を失い、他人を犠牲にしても先に進もうとしていた男は、もういない。今ここの日本にいるのは、頼れるナイスガイのジャン・ジャックである。

そしてその隣を歩くのは、美しきエルフのピターシャルである。この組み合わせで街を歩くということが悲劇を招くとは、ふたりは少しも思わなかった。

「あ、あのっ」

ワルドたちの背後から、遠慮がちな声がかけられる。

振り返ると、素朴な顔立ちの少女がふたり、おずおずと歩み寄ってきた。

ひとりは黒髪を胸の辺りまで垂らした、丸眼鏡の小柄な娘で、小脇にスケッチブックを抱えている。もうひとりは茶色い短髪で背が高く、肩から大きな鞆をかけていた。

「ふむ、何かご用かな？ お嬢さん方」

貴族として礼儀作法を学んでいたワルドは、自分よりずっと年下のレディたちにも丁寧に応対した。

その優しい言葉づかいと、ハンサムな容姿とが少女たちの緊張をやわらげ、それからの会話をスムーズにさせた。眼鏡の娘が、安心した様子で口を開く。

「突然すみません。私たち、〇大学で美術を勉強している者で……あのテーマのある人物画を描きたくて、そのモデルを探してたんです。

そしたら、おふたりを偶然見つけてまして、あまりに描きたいテーマにぴったりの人たちなんで驚いちゃって……そ、それで、もしよろしければ、絵のモデルになって頂けませんか？ お時間は、できるだけかけないようにしますのです」

「絵のモデル？」

ワルドとビダーシャルは、思わず顔を見合わせる。

「どうする、ビダーシャル。僕としては、引き受けてあげても構わないのだが、あなたの都合は？」

「統領から承った用事は、急ぎのものではない。それに、我々にも女性に優しくすべしというマナーはあるからな。……お嬢さん方、我々でよければ、モデルとやらをお引き受けしよう」

ビダーシャルがそう告げると、少女たちはぱつと表情を明るくして、「ありがとうございます！」と、バスのエンジン音にも負けない声でお礼を言った。

「そ、それじゃ、一気にデッサンしちゃいますから、ポーズの指定をさせて頂いて構いませんか？」

眼鏡の少女はバツとスケッチブックをめくり、茶髪の少女から鉛筆を受け取ると、絵を描く構えを取った。

「まず、おふたりで向かい合って立って頂いてですね…… おひげのお兄さんが、左手をもつお一方の肩に乗せて……」

「ふむ、こっつかいっ」

ワルドの左腕は、かつてガンダールヴの平賀才人に切り落とされて、今は義手である。しかし、魔法で動く義手は、本物の腕と変わらぬ滑らかな動きを見せ、その手のひらをビダーシャルの右肩に乗せた。

「そうですそうです。そして、右手で相手のあごをくいと上げるようにして…… あ、そちらのひげのない方のお兄さんは、おひげのお兄さんの顔を見つめるようにして…… あと、お互いに少し顔を赤らめてくれると、さらに臨場感が……」

「待て。……いや、ちょっと待ってくれ」

ワルドもビダーシャルも、その辺で何かおかしいな空気を感じた。

「そ、それは、この国の一般的なモデルのポーズなのかな？ 僕たちの感覚からすると、その……失礼ながら……少々、不健全なように思われるのだが……」

男同士が向かい合って、熱く見つめ合う。そんな肖像画は、ハルケギニアにはない。

ワルドの問いかけに、少女はよくぞ聞いてくれました、とばかりに、目を輝かせて説明を始める。

「一般的ではないですね。実を言いますと、私たちが描こうとしているのは、ある小説の挿絵なんです。物語のワンシーンを絵にするので、登場人物たちがしているのと同じポーズを取ってもらったんですよ」

「小説の挿絵？ なるほど、そういうことが。」

しかし、いったいどういう小説なんだい、僕たちがしたようなポーズを、登場人物たちが取っている物語というのは……何となく気になるんだが……」

「あ、見ますか？ ネット小説なんですけど、ノートパソコン持ってきてるんで、ごらんに入れられますよ」

茶髪の少女が、鞆からノートパソコンを取り出し、その画面をワルド

ドたちの方に向ける。

すでにインターネットに接続しており、画面には文字のびっしりと並んだページが表れていた。どうやら小説投稿コミュニティのようで、タイトルと作者名があり、その下に本文が横書きで始まっている。

「どれどれ、ちょっと読ませてもらう。ビダーシャル、あなたも見るかい？」

「いや、日本語の読み書きについては、まだ勉強を始めたばかりだ。たぶん見てもわからない」

「じゃあ、僕が朗読しよう。なになに……タイトルは『聖地への熱望』」

聖地への熱望 第三話（作者：東さん）

聖地を捜し求めるウルディー子爵は、とうとう聖地を管理するエルフ一族の幹部、ビドアーサルと接触することに成功した。

砂漠の真ん中にたたずむ石造都市、その中心たる総評議会本部の一室で、ウルディーはビドアーサルを問い詰める。

「エルフよっ、僕は何としても、きみの隠している聖地を探検したいんだっ！」

そのためなら、力に訴えることも辞さないっ！ さあ、入らせてくれ、狭く奥深い聖地に！」

ウルディーはビドアーサルの肩をつかむ。野心にぎらついた目が、羽根飾りのついた帽子の下に輝いている。

ビドアーサルは逃れようと後ろに下がったが、ウルディーのより強い力で押され、転倒してしまった。エルフは精霊魔法が使えるため、魔法使いとしては人間より優れている。しかし、肉体の線は細く、力はいはあまり強くない。鍛えあげた元軍人のウルディー子爵のたくましい腕、筋肉で引き締まった重い肉体が、上から覆い被さってきては、ビドアーサルは非力な女性程度の抵抗しかできなかった。

「無駄だ、逃がさない……聖地はもう目の前なんだ！ ほら、もう手が届く場所にある……！」

ウルディーの手が、ビドアーサルのズボンの中に入り込む。尖った耳をぴくぴくと震わせ、ビドアーサルは必死の抵抗を試みる。

「うつつ、や、やめる蛮人っ！ そこは聖地などではないっ……不浄なる『悪魔（シャイターン）』の門だぞっ……ゆ、指を入れるなあっ……！」

女性のような甲高い悲鳴が響き渡る。エルフは美しい種族として知られ、男性でも女性のような中性的な容姿である。とりわけ、ビドアーサルは美しい青年で、ウルディーの聖地への欲望を熱くたぎらせた。

そして、ウルディーは見つけた聖地を深く掘り進めようと、堂々たるスコップを

「……………」

「ウルドは、本気になったガンダールブと対峙した時以上の緊張を感じた。」

ビダーシャルは、夏の日差しにも流さなかった汗を、額に流した。

少女たちは、ものすごい笑顔で、男ふたりの背後から黄色い声を降らせた。

「ネットで今すごく人気の、『東さん』のBL小説の挿絵を描かせてもらう許可を、私もらっちゃったんですよ〜！」

この聖地への熱望シリーズ、ホント大好きで、ぜひ全力でいい絵を描きたくって……ほら、このウルディー子爵がおひげのお兄さんに、ビドアーサルがひげのないお兄さんにイメージぴったりでしょ？

「本当はカラミのシーンのモデルをやってもらいたかったんですけど、さすがにそれはって思って、ふたりの接触のシーンを……でも、カラミを見たら、おふたりもやってみたくなるかも！ ウルディー子爵

の攻めがすごいんですよ、ビドアーサルを乱暴に扱ったかと思っただら、優しい言葉をかけてみたり！ でも、そのあとのクライマックスもいいんですよ。精霊魔法の『反射（カウンター）』を応用した『反転（リバース）』という術をビドアーサルが使って、タチとネコを逆転させて、一転してワルディーがいじり倒されちゃうんです。この展開は、私たち愛好家の中ではもう伝説ですよー！」

すごいよねー、とか仲良さげに笑いあう少女たち。

ワルドは一步引いた。

ビダーシャルは、その地の精霊と契約した。

ふたりは頷き合い、少女たちの隙をついて、一気に踵を返して走り始めた。

走る、走る。鍛えあげたワルドの脚の筋肉が、地を蹴りどんどん加速する。ビダーシャルも風と地の精霊を利用して、異様な速度での疾走を可能にした。

彼らは逃げた。地球という新たな土地で出会った、得体の知れない禍々しいものから。

「ジャン・ジャック。もはや一刻の猶予もならん。目的のモノを手に入れて、この世界から早く離脱しようではないかー！」

「ああ、賛成だ。ルイズに会うとか、そんな悠長なこととは言っていられぬー！」

ふたりの意見は一致した。「こんな恐ろしいところにいられるか！

俺は自分の世界に帰るぞ！（意識）「ということである。

（しかし、あの作者の「束さん」……… いったい何者なんだ……… その名に聞き覚えがあるような、ないような………）」

ふたりは首を傾げたが、その答えはついに出てこなかった。